令和２年度

宮城県遺跡調査成果資料集

令和２年１２月
宮城県考古学会

2019・2020 年度姥沢遺跡の発掘調査の概要

東北大学大学院文学研究科考古学研究室
東北大学埋蔵文化財調査室

１．調査要項

遺跡名称：姥沢遺跡（宮城県村田町沼田字姥沢 28・77・80 番地）
調査主体：東北大学大学院文学研究科考古学研究室
調査協力：東北大学埋蔵文化財調査室
調査担当：東北大学大学院文学研究科考古学研究室　教授　鹿又喜隆
　　東北大学埋蔵文化財調査室　特任准教授　菅野智則
調査期間：2019 年 10 月 28 日～11 月３日（試掘調査）、2019 年 12 月 24 日（踏査）
　　2020 年 10 月 25 日～11 月７日（本調査）
調査面積：2019 年度 18.82 ㎡、2020 年度 40.99 ㎡

２．調査の目的

当研究室では、縄文時代の集落遺跡の発掘調査を継続して実施しています。近年は、仙台市野川遺跡などの縄文時代草創期の集落の調査を実施しており、縄文時代開始期における居住形態に関する研究を進めています。このような調査を通じ、縄文時代の各時期の様相を通史的に研究することにより、縄文時代の具体的な実態をより明らかにすることができるものと考えています。

村田町姥沢遺跡（第１・４図）は、これまでに地元の方により表面採集されてきた資料から、縄文時代の早期・中期・後期と、弥生時代にまたがる重層的な遺跡であると考えられます。とくに縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての遺物が多く、地形等から竪穴住居跡等の存在も想定できました。

今回の調査では、この姥沢遺跡の発掘調査を通じて、縄文時代中期から後期にかけての居住形態の実態について研究することを目的としています。この時期には、急激な環境変動があり、集落遺跡の急減等の様々な大きな変化があったことがわかっています。姥沢遺跡の調査成果から、人類の環境変化への対応を考える上で重要な知見を得られるものと考えています。

また、姥沢遺跡が位置する村田町周辺地域において、縄文集落遺跡の発掘調査事例は多くはありません。村田町より南部の蔵王町・白石市における当概期の集落遺跡（菅生田遺跡・二屋敷遺跡）の発掘調査事例からは、往々にして関東や北陸系の土器が混ざり、敷石住居跡等の関東・中部地域の特徴が混在する様相が見受けられます。この様な状況を踏まえると、本調査成果は、宮城県南部と遠隔地との地域間交流を考える上で、さらに重要な資料となることが考えられます。

2019 年度の調査では、遺跡の状態を確認する試掘調査と位置づけ、各地点に小規模の調査区を設定し（第２図）、各時期の包含層の分布状況、堆積状況を確認する試掘調査を行いました。その結果、２区と６区において、遺物包含層等を確認することができました。また、遺跡の範囲を確認するための踏査も実施しています。今年の 2020 年度の調査では、前年の試掘調査を踏まえ、その内容確認を目的とした調査を実施しました(第２図)。

３．2019 年度の調査の概要

（１）１区（2.01 ㎡）

畑地に遺物が多数分布していることから、畑地東側の斜面部に遺物包含層が残っている

ことを想定して調査区を設定しました。調査の結果、崩落土と考えられる土層の直下から地山土を確認しました。遺構等は確認できませんでした。畑地等の造成により、この地点の包含層はすでに削平されたものと考えられます。出土した遺物等は、表土や崩落土に数点混じる程度で摩耗しています。

（２）２区（合計 3.82 ㎡）

２区は丘陵の中段目にあたり、遺構や遺物包含層等が存在するか確認するために調査区を設定しました。調査の結果、旧耕作土の下から土器や石器等の遺物と共に黒色土の広がりを確認しました。そのうち東側ではとくに黒色が強く、焼土等も含んでいます。この黒色土層の西側では、黒色土の混じりは少なく、遺物等が表面に認められる土層が広がります。これらの特徴から、当初は遺構と考えました。

黒色土層の広がりを確認するため、東側に拡張しました。その結果、その土層の西端を確認しました。また、その内容を確認するため、北側にサブトレンチを設定し床面近くまで掘り下げました。その床面近くからは、中期末葉土器の破片が出土しています。この埋土は全て回収し、その土壌を乾燥ふるい（１㎜・３㎜）にかけたところ、チップが多量に混ざることが確認できました。2019 年度の調査では、この時点で止めました。

（３）３区（2.04 ㎡）

丘陵頂部の平坦面には、遺構等の存在を想定されることから、耕作をしていない場所を選択し、調査区を設定しました。調査の結果、表土直下から地山土を確認し、遺構・遺物も全く確認できませんでした。また、断面観察の結果、地山土の最上層は、川崎スコリアを含む層であるため、縄文時代の土層は全て削平されていたことが判明しました。

（４）４区（2.1 ㎡）

畑地の西側に南北に走る小さな沢があり、その近くに低湿地部を確認するための調査区を設定しました。調査の結果、現在の耕作土下に、耕作土と類似する特徴を有する土層が続きます。この土層には、印鑑等の現代の物品を含んでおり、新しい時代の造成土と考えられました。その下部を確認するためグリッド西側を深掘りしましたが、現地表面から 1.2m 程まで続くことを確認した時点で、湧水等のため掘り下げを中止しました。そして、その深掘り地点の底面からボーリングステッキを用いてその下部を確認したところ、類似する土層がさらに 0.3m 程続いた後に地山土を確認することができました。これらの結果から、この区画では、畑地造成の際に削平した上で、土を押し出した状況が想定できました。

（５）５区（2.04 ㎡）

５区は、４区と同様の理由で調査区を設定しました。調査の結果、現耕作土（１層）と旧耕作土（２層）の下から、砂混じり黒色土層（３層）を確認しました。この３層の厚さは最大で 42cm 程であり、その下部からは地山土を確認しました。この３層からの出土遺物は多くはありませんが、小片の縄文土器が出土しています。これらの土層の特徴や出土遺物、次の６区の調査成果からすると、縄文時代の遺物包含層の末端部と考えられました。

（６）６区（合計 6.81 ㎡）

６区の土層も５区と同様に１～３層に区分することができました。３層は、土器や石器類を多量に含んでおり、良好な遺物包含層と判断できました。この出土土器は、後期前葉を中心とする時期のものでした。この成果に基づき、遺物包含層の広がりを確認するため、西側にさらにグリッドを設定しました。当初設定したグリッドを 6a 区とし、西側に向かって 6c 区、6e 区、6g 区の３カ所を設定しました。

それらのグリッドの調査の結果、6c 区の中央あたりで、従来の２層の下部にやや黒みが強い層（2b 層）が存在することが判明しました。この土層は、現代の物を含んでおり、畑地造成の際に形成されたものと考えられました。6e・6g 区では、この 2b 層が面的に厚く堆積するため、その下部は 2019 年度の調査では確認できませんでした。

（７）踏査（第３図）

姥沢遺跡の範囲を確認するため、2019 年 12 月 24 日に村田町教育委員会の協力を受けて踏査を行いました。第３図のＡ地点が発掘調査を行った地点となりますが、周囲のＢ～Ｊ地点の各地点で遺物を採集することができました。

Ｂ～Ｇ地点では縄文後期土器を中心とし、とくにＢ地点では弥生時代中期の土器のほか、玉や石器等を確認することができました。Ｃ～Ｇ地点の土器は、小破片のみでした。とくにＣ・Ｄ地点の土器はかなり摩耗しており、上方のＡ地点から流出した遺物である可能性も考えられます。Ｈ～Ｊ地点では、縄文土器のほか土師器が散布していました。

４．2020 年度調査の概要

（１）２区（24.57 ㎡、第５図 a・b）

昨年度の調査では、遺構と想定していた部分の全体像を確認するため、２区を広げる形で調査区を設定しました。そして、広範囲にプランを確認した上で、昨年度のサブトレンチをやや広げて掘り下げた結果、遺構と想定していた部分は、遺構ではなく斜面堆積の包含層であることが判明しました。確認できた範囲の包含層の土層は１～５層に分かれ、観察できた出土遺物は中期末葉の土器が多く認められました。2020 年度の調査では、K5 区と K6 区の北側部分の１・２層を掘り下げた時点で調査を終了しました。

また、遺構を探すため、東側にも拡張しました。その結果、遺物は出土しませんでしたが土坑を１基確認しました。これらの調査成果からすると、竪穴住居跡等の遺構群は、南東方面にあることも想定できます。

（２）６区（合計 16.42 ㎡、第５図 c・d）

昨年度確認した遺物包含層である３層の内容と遺構の確認を行いました。しかし、出土する遺物量がかなり多く、掘り下げに時間がかかったため、今年の調査は３層中で止めました。出土した遺物は、後期前葉の土器が多く、石器類も多量に出土しています。

また、埋設土器１基を確認しました。底部付近のみのしか残っていなかったため、時期等の詳細は不明ですが、土層やその他の出土遺物の様相からすると、包含層と変わらない時期であることが推定されます。

５．まとめ

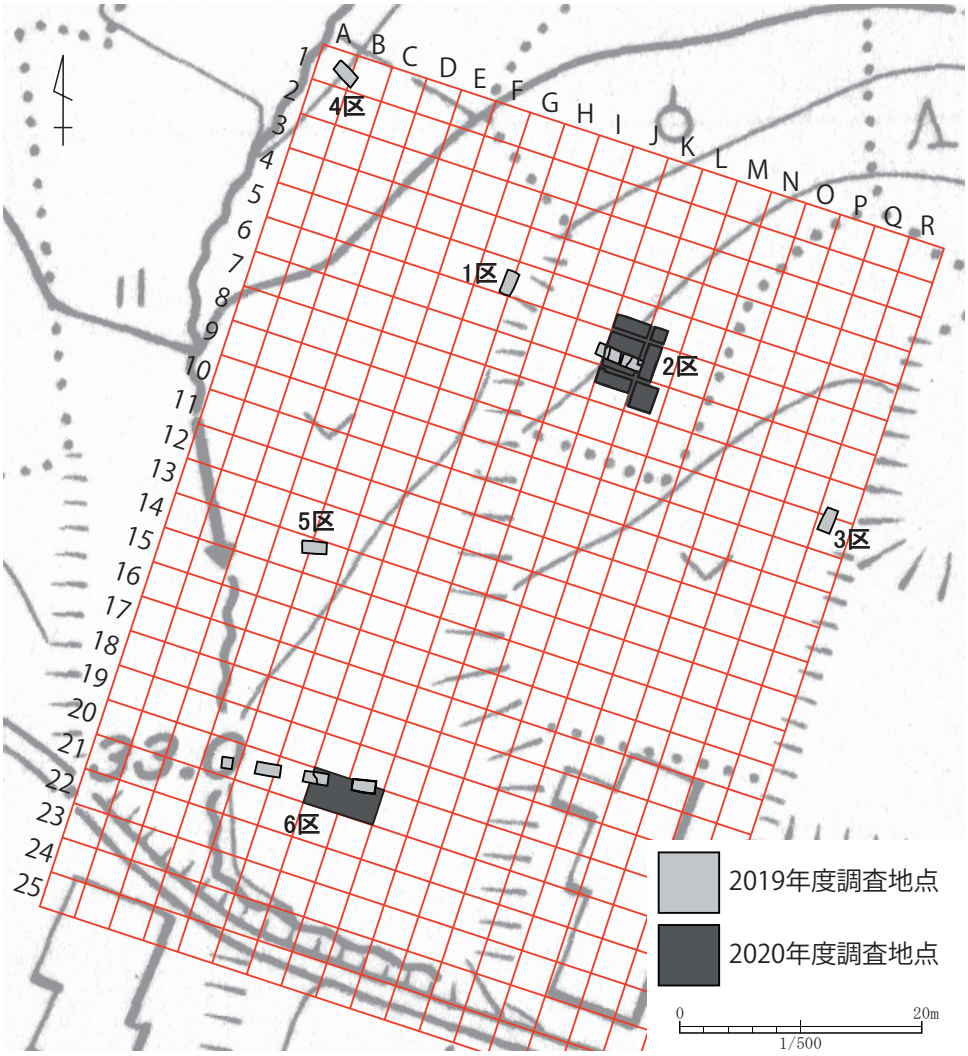
2019 年度の調査を踏まえた 2020 年度の調査では、遺物包含層と遺構の確認調査を行いました。２地区で遺物包含層の調査を行いましたが、包含層の形成時期が異なり、時期による居住形態を考える上で重要な成果であったと言えます。また、竪穴住居跡等の居住に関わる施設は確認できていませんが、近辺に存在することが想定されます。来年度以降の調査では、遺物包含層のさらなる内容確認を進めるとともに、これらの遺構群の所在について確認を進めていきたいと考えています。なお、これらの成果については、現在報告書作成のため整理作業を進めています。

謝辞

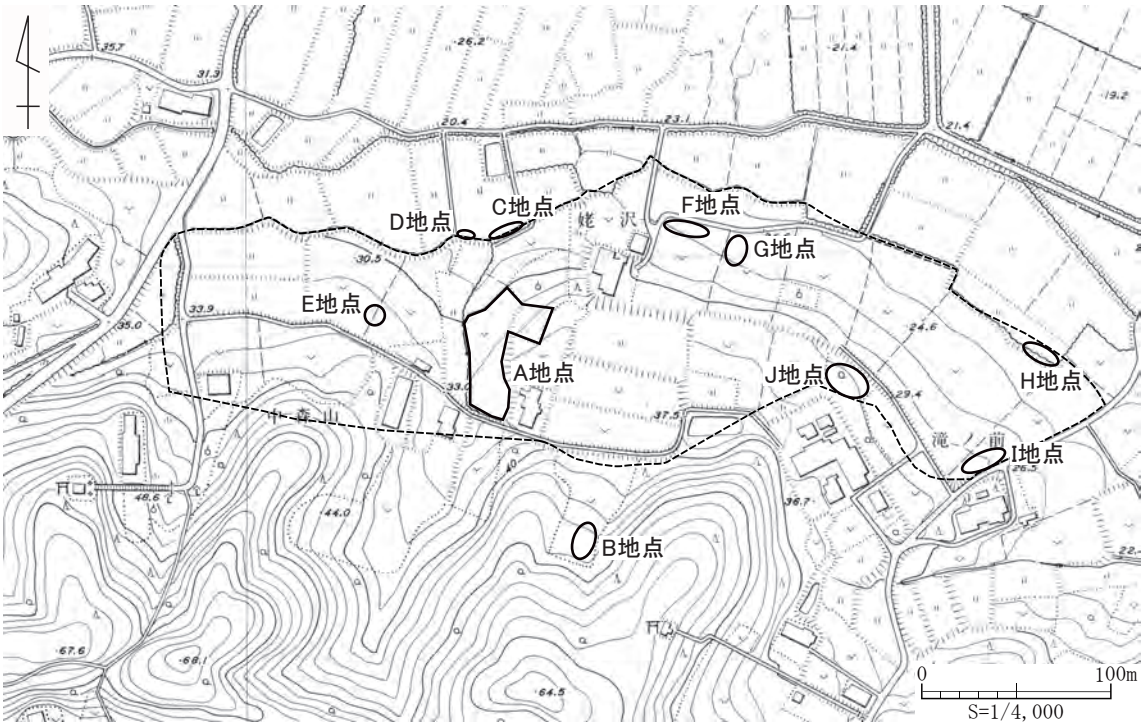
これらの発掘調査については、地元の村田町教育委員会、村上侃彦氏のほか、地権者の村上正一・栄氏、佐藤勇一氏を始めとした皆様のご協力とご配慮を得ました。また、東北大学東北アジアセンター研究センターの佐野勝宏先生には、ドローンによる空撮・測量を実施して頂きました。文末に記し、御礼申し上げます。

第１図　姥沢遺跡の位置と周辺の遺跡

＊グレーは縄文の遺跡を示す。

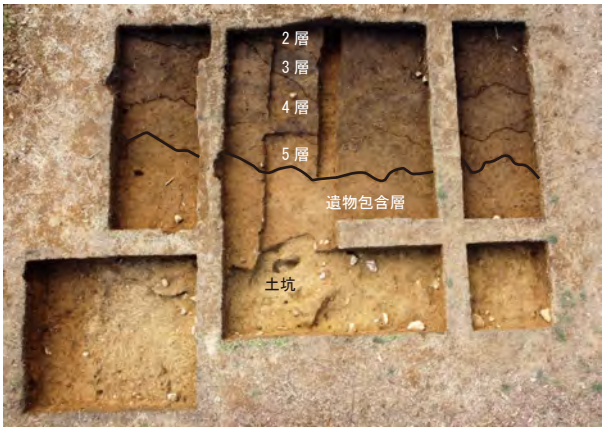


第２図　姥沢遺跡調査地点
（村田町 1985 年測量図「X-RD17-1」S=1/,500 より）



第３図　踏査にて遺物を採集した地点
（村田町 1985 年測量図「X-RD17-1」S=1/,500 より）

第４図　調査区周辺の地形



a. ２区調査最終状況（右が北）

b. ２区包含層３層遺物出土状況（西から）

c. ６区調査最終状況（下が北）

d. ６区包含層遺物出土状況（東から）

第５図　2020 年度調査状況

令和２年度　宮城県遺跡調査成果資料集

発行日：令和２年（2020）年 12 月 12 日

編　集：宮城県考古学会企画幹事会

発　行：宮城県考古学会
郵便振替口座　02210 - 1 - 41729
〒980－8576　宮城県仙台市青葉区川内 27－1
東北大学大学院文学研究科考古学研究室気付
e-mail　info@m-kouko.net

印　刷：佐藤印刷株式会社
〒981-2501　宮城県伊具郡丸森町大内字石神 57